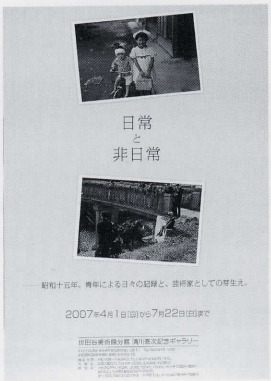
## 平成19年度 第1期展
# 日常と非日常
## 青年の記録　芸術家の表現

会期：4月1日～7月22日
入場者数：832人
担当者：髙嶋雄一郎

清川泰次は、慶應義塾大学予科に入学して間もなく写真部に所属し、学生生活を通じて数千枚にも及ぶ写真を撮影した。当初は家族の肖像や旅行先での名所名跡の撮影など、日常的な題材を即物的に記録する術(すべ)として彼は写真を用いている。しかし次第に、写真の技術書などを読み漁り、写真部で熱心な指導を受けた影響で、当時流行した新興写真の影響を多大に受けたような“作品”を徐々に残していった。つまりは、こうした中で彼の撮影する写真は、日常を留める“記録”から、より多彩な表現＝非日常を盛り込んだ“作品”へと展開していったのだ。

本展では、彼が“記録”として撮ったと思われる写真、“作品”として撮ったと思われる写真を併置することにより、彼が一青年の眼差しから芸術家としての視線を獲得するに至る変遷を辿った。

展示内容：写真92点　絵画11点　立体作品3点



B2ポスター

B3ポスター

チラシ

展示風景

## 平成19年度 第2期展

# 青年とライカ

## 清川泰治がライカⅢaで写した昭和初期の学生生活

会期：7月28日～11月25日
入場者数：1,059人
担当者：髙嶋雄一郎

戦後、アメリカへの留学などを経て抽象画家として独自の表現を模索した清川泰次（1919－2000）が、その若かりし頃に膨大な数の写真を撮影していたことは殆ど知られてこなかった。中でも、清川が特に心を奪われたのはライカだ。清川は大学の写真部に所属したのちにⅢa型（1935年発表）を入手、稀代のライカの名手であった木村伊兵衛氏の中央光房を訪ね、当時発売されたライカの手引き本を多数愛読しながら、自らの生活のあらゆる場面を撮影したのである。

本展では、清川泰次が大学在籍時にライカⅢaで撮影したもののうち現存する約3400点の35mmフィルムから厳選して初公開すると共に、学生時代に清川が愛読したライカ関連の書籍もあわせて展示することによって、ライカという唯一無比のカメラの魅力、当時の学生生活、そして昭和初期という特異な時代に迫ろうとしたものである。

展示内容：写真75点　絵画6点　立体作品1点　書籍（当時のライカの技法書など）27冊
清川泰次による写真アルバム10冊

B2ポスター

B3ポスター

チラシ

展示風景

## 平成19年度 第3期展

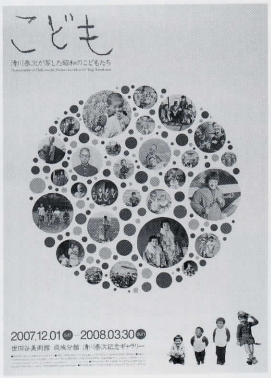
# こども

## 清川泰治が写した昭和のこどもたち

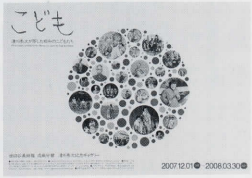
会期：12月1日～2007年3月30日
入場者数：962人
担当者：髙嶋雄一郎

戦後に抽象画家として活躍する清川泰次が昭和十年代、大学生の時に撮影した無数の白黒写真には、何百点もの子どもの写真が含まれている。生まれたばかりの新生児から、室内で佇む赤ん坊、外で遊ぶ学童、撮影会のモデルの少女など、その姿や表情は千差万別だが、彼の残した写真は、当時の子どもたちが当時どのような生活をしていたのか、そのありのままを知る格好の証言となるはずだ。本展では、一人の青年が残した子どもたちの写真を軸に、その昭和初期という類稀な時期に迫りながら、当時の「こども」という存在を探った。

展示内容：写真206点　絵画4点　立体作品1点
書籍（当時のライカ技法書など）20冊
清川泰次による写真アルバム12冊



B2ポスター



B3ポスター

チラシ

展示風景